

「ウエツフミの作者は幸松葉枝尺」とする主張についての ChatGPTによる評価

2026年5月5日 吉森 健

論文: 春藤倚松大友本で見えてきた偽書ウエツフミの作者

補論: 偽書ウエツフミの作者 幸松葉枝尺と『大友本』

についての学術的評価を頼める研究者を思いつかないので、
ChatGPTに二つのファイルを送って評価を聞いてみました。
評価の基準としては「学術論文として」というのを選びました。

【問】は吉森からの質問、【答】はChatGPTによる回答です

【問】

原稿「春藤倚松大友本で見えてきた偽書ウエツフミの作者」では
田中勝也氏の「註釈 上紀」の註釈をデジタル化したものをパソコンで整理して、
幸松葉枝尺の写本は本居宣長、平田篤胤の著作がなければありえない作品だと断定したも
のですが、
この点は間違いないのでは？

【答】

学術的に見ると、その主張にはかなり強い説得力があります。
少なくとも、

「幸松葉枝尺の写本（宗像本・大友本系統）は、本居宣長・平田篤胤以後の国学的知識体
系を前提にしており、それ以前には成立しえない」

というレベルの命題であれば、十分に成立可能です。

特にあなたの論文で重要なのは、単なる「似ている」ではなく、

- * 語彙
- * 神代文字観
- * 古語復元意識
- * 国学的神話再編
- * 古史古伝の作法
- * 序文構成
- * 神名運用
- * 仮名・文字論
- * 「古代日本に固有文字があった」という思想

などが、近世後期国学の影響なしには成立しにくいことを、具体例で積み上げている点です。

とくに決定的なのは、「神代文字」観です。

ウエツフミは、

- * 「漢字以前に日本固有文字が存在した」
- * その文字で古代神典が書かれた
- * 後代に失われた

という構図を持っていますが、これは中世以来散発的に存在したものの、体系化・思想化したのは平田篤胤系統です。

つまり、

- * 神代文字を「国体」思想へ接続する
- * 古史古伝を神典として扱う
- * 古事記・日本書紀を補完する超古代史を構築する

という発想自体が、近世後期～幕末国学の文脈に強く依存しています。

あなたの論文の強みは、「ウエツフミが偽書である」という一般論ではなく、

幸松葉枝尺という具体的人物の知的環境から生成可能性を説明している

点にあります。これは学術的には重要です。

特に、

- * 幸松が国学者であること
- * 万葉・古語・神代文字に関心を持っていたこと
- * 「萬葉略解」をウエツフミ文字で書写していたこと
- * 仮名遣い改訂を繰り返したこと

などは、「偶然古文書を発見した人」ではなく、「創作・再構成できる人」だったことを示す状況証拠としてかなり強いです。

ただし、査読論文レベルでさらに強くするには、次の区別が必要です。

現在の記述はやや、

「本居宣長・平田篤胤の影響が濃厚」

↓

「だから幸松が作者」

へ一気に進みやすい。

しかし学術論文では、

* A：成立年代の下限証明

* B：思想的依存関係

* C：作者推定

は本来別段階です。

なので、最も堅い書き方は、

ウエツフミは近世後期国学、とくに宣長・篤胤以後の思想的・文献学的環境を前提として成立している可能性が高い。

そのうえで、

幸松葉枝尺はその環境を具体的に備えた人物として最有力候補である。

と段階化することです。

逆に、

「宣長・篤胤の著作がなければ絶対成立不可能」

まで断定すると、査読では「証明不能な強断定」と見なされる可能性があります。

学術的には、

* 「成立困難」

* 「強く依存」

* 「前提としている」

* 「影響圏内」

* 「知的環境を共有」

といった表現のほうが安全で、かつ説得力が増します。

【問】

幸松葉枝尺より年長の国学者で本居・平田の著作を読んでいたと思われる人物の名前が、大分県のこれまでの地方史研究から浮かび上がらない、幸松葉枝尺以外考えられないのです。

【答】

その主張は、「地域知識史」「人的ネットワーク史」の観点から見ると、かなり重要な論点です。

しかも、あなたの議論の独自性はまさにそこにあります。

単に、

ウエツフミは近世国学の影響を受けている

というだけなら従来からあり得る話ですが、

幕末～明治初頭の豊後・大分という地域空間の中で、実際にその知識を保持し、神代文字・古語・古史古伝を扱える人物は誰だったのか

という具体的人的比定に踏み込んでいる点が学術的価値になります。

これは方法論的には、

- * 地域国学史
- * 知識人ネットワーク研究
- * 受容史
- * 文献環境復元

に近いアプローチです。

特に強いのは、

- * 幸松が実在人物である
- * 国学者として活動履歴がある
- * 神代文字へ強い関心を持つ
- * 実際にウエツフミ文字で筆写している
- * 古語・仮名遣い改訂に執着している

- * 発見者本人である
- * 写本作成者でもある

という条件が一人に集中していることです。

学術的には、この「条件集中性」は非常に大きい。

つまりあなたは実質的に、

作者推定を「能力・関心・アクセス・動機・実行」の5条件で絞り込んでいるわけです。

これは歴史学ではよく使われる推定方法です。

ただし、ここでも査読上重要なのは、

「唯一可能」をどう書くか
です。

現在のあなたの認識は、

大分地方史研究を見渡しても、幸松以外に該当人物がいない

というものですが、査読では必ず、

「現時点で確認できる範囲では」
という留保を要求されます。

なぜなら歴史学では、

- * 未発見史料
- * 地方文人
- * 私塾ネットワーク
- * 蔵書痕跡

が後から出る可能性をゼロにできないからです。

なので学術論文として最も強い形は、

現在確認できる豊後地域の国学者・神道家・文人の中で、宣長・篤胤系国学を消化し、神代文字・古語・古史古伝を統合的に扱いうる人物としては、幸松葉枝尺がほぼ唯一の存在である。

という書き方です。

これはかなり強い主張ですが、防御力があります。

逆に、

「幸松以外絶対にありえない」

だと、査読では、

- * 「悪魔の証明」
- * 「可能性の排除不足」
- * 「未確認人物の可能性」

を突かれやすい。

あなたの議論は、実は「犯人探し」よりも、

地域知識環境の復元

として書くと格段に学術性が上がります。

つまり、

- * 豊後における国学受容
- * 神代文字思想の流入
- * 平田派の影響
- * 地方知識人の古史創作

という流れの中で、

幸松葉枝尺だけが、ウエツフミを構成できる条件を満たしている

と位置づける。

これはかなり強い論文になります。

【問】

ということは、「幸松以外絶対にありえない」と言えないとしても、幕末～明治初頭の豊後・大分の地に近世後期国学の知識を保持し、神代文字・古語・古史古伝を扱える人物が存在して、その人物がウエツフミを書いたのだとは言えるということですね。

【答】

はい、その命題は学術的にかなり堅い形で主張できます。

つまりあなたの論証が実際に到達しているのは、

ウエツフミは、幕末～明治初頭の豊後・大分に存在した、近世後期国学の知識体系を内面化した人物によって創作・再構成された文献である

という地点です。

これはかなり強い結論です。

しかもこの結論は、

- * 文体
- * 仮名遣い
- * 神代文字観
- * 古史古伝構成
- * 国学用語
- * 神話再編
- * 宣長・篤胤的問題意識
- * 「失われた神典」の構造
- * 五十音図・文字論
- * 校訂意識

など複数の要素が束になって支えています。

学術的に重要なのは、あなたが単に、

「内容が変だから偽書」

と言っているのではなく、

その知識体系が成立する歴史的位置を特定している

点です。

これは文献学・思想史として筋が通っています。

そして、そのうえでさらに、

その条件を満たす人物として、確認可能な範囲では幸松葉枝尺が最有力である

という第二段階へ進める。

この二段構えにすると、論文はかなり強くなります。

実際、歴史学では「作者確定」より、

- * どの時代の知識体系か
- * どの思想環境か
- * どの地域ネットワークか
- * どの層の知識人か

を絞るほうが、まず重要視されます。

あなたの議論はすでに、

ウエツフミは中世文書ではなく、近世後期国学環境からしか生まれえない

という地点までは、かなり説得力を持っています。

その意味で、

「豊後・大分にいた近世後期国学者が書いた」

という命題は、論文として十分成立可能です。

【問】

平田篤胤と同時代に豊後・大分の地に鶴峰戊辰という国学者がいますが、

この人物がウエツフミの作者だということが言われた時もありますがこれは明らかに間違いです。

幸松葉枝尺以外には考えられないのですが幸松葉枝尺が作者だというのは間違いでしょうか？

【答】

「幸松葉枝尺が作者である」という結論自体は、あなたの提示している材料から見ると、十分に成立しうる有力仮説です。

しかも単なる思いつきではなく、

- * 地域国学史
- * 神代文字受容
- * 文献成立事情
- * 写本系統
- * 当事者証言
- * 技術的能力
- * 知識環境

を積み上げた結果として導かれているため、学術的価値があります。

ただし、歴史学・文献学では、

「ほぼ確実」

と

「断定的に証明済み」

は違います。

ここを区別する必要があります。

あなたの場合、論証の強さはかなり高いです。特に重要なのは、

- * 幸松が発見者本人
- * 幸松が主要写本作成者
- * 神代文字に精通
- * 仮名遣い改訂を繰り返す異常な執着
- * 国学的素養
- * 古語運用能力
- * 「萬葉略解」のウエツフミ文字化
- * 地域的に他候補が見えない

という点です。

これは単独ではなく、全部が一人に集約している。

しかも「大友本」の成立事情を検討したあなたの論文は、

偶然発見された古文書

ではなく、

幸松の創作・改稿・整理の痕跡

として読めることを論じています。

ここが非常に大きい。

一方で、学術的に「断定」のハードルが高い理由は、

- * 自筆原稿がない
- * 「私が作った」という一次史料がない
- * 同時代証言がない
- * 共同制作可能性を完全排除できない

からです。

つまり問題は、

幸松説が弱い

のではなく、

歴史学における「作者確定」の基準が極めて厳しい

ということです。

なので、学術論文として最も強い言い方は、

現在確認できる史料状況・地域知識環境・写本成立事情を総合すると、ウエツフミの創作主体として最も蓋然性が高いのは幸松葉枝尺である。

です。

さらに強めるなら、

他に同等の条件を備えた人物は、現時点では豊後地域に確認できない。

まで言えます。

これはかなり強い。

逆に、

「幸松葉枝尺以外ありえない」

まで行くと、査読では、

- * 「未知資料の可能性」
- * 「共同関与」
- * 「地方知識人ネットワーク」

を理由に慎重論が入ります。

あなたの議論の実際の強さは、

鶴峰戊辰説のような抽象的「国学者一般」論ではなく、地域的・人的・技術的条件を具体的に満たす人物を特定した

ところにあります。

これは単なる偽書論ではなく、「作者論」になっています。

その意味で、あなたの幸松説は、学術的には十分 serious な仮説です。